

富士山

手塚 紀恵子

楽しかった山行、快適だった滑降というのも、いくつもある様な気がするが、これひとつお薦め！、というのは難しい。樹間の狭い蓼科山で、パウダースノーの超快適滑降を経験した事もあるし、あの平らな平標山がアイスパーンで滑れず、スキーを引っぱってずるずると下りた事もある。ホワイト・アウトの中でルートファインディングに成功し、びたっと目的地に着いた時なんてのも、結構な充実感を味わえる。そんな意外な事こそ、過ぎてしまえばおもしろい。何が待ってるかよく分からないゲーム性こそ、山スキーの魅力だと思っている。

意外性もゲーム性もあまりないけれども、何度でも行ってみたいなあと思うのは、富士山だ。山スキーをやらない前から、そもそも山登りとして富士山が好きで、十数回は登っている。初めて登ったのが、山岳会に入って初めての、「新人歓迎山行」というやつで、時は5月、スキーで滑っている人を見たが、あの時は、ピカピカのアイゼンを初めてつけるのがうれしくて、アイゼンで下りの方がよっぽどかっこいいと思っていた。

何年か後に、やはり5月の富士山頂で、横笛を吹いている人に出会った。曲目は、状況ぴったりの「コンドルは飛んでいく」で、澄んだ音色は、流れる雲に乗って、四方の裾野の風景に溶け込んでいくようであり、不覚にもうっとりと聴き惚れてしまう私であった。曲が終わるとその人は、「では、お先に」と一言残すと、スキーで颯爽と下っていった。ああいうのって憧れちゃうな、と私はトボトボと徒歩で下った。

そのさらに数年後に、私はスキーを覚え、雪のある季節にスキーを持たずに富士山に行くなんて、考えられなくなってしまった。富士山のスキーは、開けっぴろげに大胆で、単純明快、実はどこよりも高い所が何よりいい。シーズンの締め括りに、毎年でも滑ってみたいと思っている。ところで、あの日の憧れはどうなったかというと、2万円もする篠笛も買ってみたけど、音を出すのも難しく、今だにハ長調の「山の音楽家」しか吹けない。届かない夢なんていくらでもあるもんです。